

鏡花の魅力に金縛り

松本 侑壬子・ジャーナリスト

映画は好きだが、歌舞伎は弱い。嫌いではないが、あまり見る機会がない。そんな私のような人にぴったりなのが、シネマ歌舞伎。歌舞伎の舞台を丁寧に映像で記録し、客席からではとらえきれない表情や動きをクローズアップで見せるなど詳細でわかりやすく、従来の歌舞伎ファンにも好評だという。

シリーズ17作目(最新作)は泉鏡花の代表作「高野聖」(十河壮吉監督)。主役「女」の坂東玉三郎が脚本・演出(共同・石川耕土)を兼ねた意欲作だ。今回は舞台公演の収録ではなく、シネマ歌舞伎用に新たに舞台上で撮影、さらに自然の中のロケーション撮影による実写映像を加えて、より映画的手法を凝らしている。編集も玉三郎自身が担当した。

鏡花作品の中でも俗世と異界にまたがる「高野聖」は、底知れず不気味で恐ろしく、しかも金縛りにあったような抗いがたい魅力のある話だ。原作は戯曲ではなく小説である。その脚本化には玉三郎色が強く反映しているのか、異界の人であるヒロインは、どこか寂しく哀しげだ。

若き修行僧の宗朝(中村獅童)は、深い山中で道に迷い、日暮れに一軒家にたどり着く。そこには妖艶で気高い女(玉三郎)と女が養っている足の立たない聾啞の青年次郎、そして世話係の親仁の3人が暮らしていた。そこで年若い宗朝の体験した恍惚と恐怖の、悪夢というにはあまりにも甘

美な一夜の物語。ここにたどり着く途中の山道で蛇やヒルに襲われ命からがら逃げて来た宗朝。“嬢様”と呼ばれるその女の導きで谷川に下り、流れて体をぬぐっていると、いつの間にか女に衣を脱がされ、ヒルに吸われた背中への傷痕から脇腹、お尻と優しくさすられるその心地よさ。自らも着物を脱ぎ寄り添う女の手を必死で振り払い、水から上がる宗朝。胸の鼓動を抑えて、女の流し目一つにも湧き上がる煩悩に戸惑う。

家に戻れば、待ちわびた次郎が甘えるのを女は優しくなだめ、歌うように促す。次郎の歌う木曾節は思いもかけず朗々と美しく、女の優しさに胸を打たれ、思わず涙する宗朝。だが、深夜、次郎と眠る女の周りに鳥や獣、訳のわからない魍魎もうりょうが集まるただならぬ気配に、宗朝は恐れおののき、必死で経文を唱えて心を鎮めようとする。

翌朝、宗朝は女に見送られながら、迷いぬく。こんな山の中で異界の者らに囲まれて暮らす美しい嬢様はこれからどうなる? いっそ修行は放棄して、二人でいつまでも愛しあって暮らすことはできないか、と。迷い悩む純情な宗朝に向かい、親仁は残酷な一言を囁く。「お前も獣にされぬうちに、早く立ち去るがいい」。あいつらは嬢様の色香に迷い助平心を出したためにあんな姿に変えられたのだ、と。

女はいずれは山姥になっていくのだろうか。誇り高く自立し、スーパーパワーをもつ孤高の女。西欧ならば、さしずめ魔女であろうか。美しさと恐ろしさは背中あわせであり、優しくもあれば底知れぬ企みを秘めた魔性の女…。

もう一度、鏡花を読みたくなる面白さである。

『シネマ歌舞伎「高野聖」』

松竹映画 (89分) / 十河壮吉監督

3月17日より全国公開

©篠山紀信

